

百 號 に 題 す

創刊以來今月を以て第百號を讀者に送るに際し、記者として實に感慨無量なるものがある。一號を編輯するの時は二號三號を良くせん事を思い、九十號百號など思いもよらなかつた。今日百號に當つて一號の當時を思へば、昨日の事の如く、月刊百冊を良く何時の間にか發行したるかの感である。元より百號と言へども年數にすれば僅かに八年餘にすぎず、一の工事にても八年位を要するもの敢て珍らしくはない、されど此八年間に於て我國の工事技術は其隆盛を極めたる事前古未曾有と言ふべきである。其間實地工事技術の發達進歩したる事も又空前の事である。

然るに爰數年來世界的の不況につれて工事技術界も稍々不振の状態に入りつゝあるも、我等は技術本來の使命より見て、少しも將來を悲觀するものではない。益々勇躍して文化第一線の施設に當らなければならぬものと思ふ。

今回工事畫報第壹百號記念編輯に當り、先輩各位及各方面の權威者より多數の指導的原稿を寄せられたる事を爰に感謝し、再び筆を新にして第百壹號に臨まんとするものである。

紀元二千五百九十三年六月

工 事 畫 報 社 同 人